第四講　家族論・ジェンダー論・言語論（後編）

家族という場に対するさまざまな問いかけが、その問いの言葉そのもののあり方を問うにいたるのは必然だった。というより、家族が言葉を必要とするというとき、それはただの性別不問の言葉ではありえなかった。不問にされ不可視にされてきたのは、なによりも女性の経験であり、必要なのはそれを明らかにする言葉であるという認識によって、その「問い」は支えられていたからである。家族をめぐる言葉は、こうして女性のあり方をめぐる言葉となる。しかし、女性をめぐる言葉は、そのまま女性の言葉でありうるだろうか。

たとえば、『男が言語をつくった』という書名をもつ本がある。そこでは、社会の家父長制的意味基盤とか言葉の家父長制的定義ということが繰りかえし強調されている。この「家父長制」という概念が、女性たちの経験を名づけなおす作業のなかで、性支配を軸とする新たな意味を与えられた名前であることはいうまでもない。この概念を根本におくことによってその本が明らかにしようとしているのは、男性による言葉の占有状態、したがって言語的に占有された社会の有り様である。ひらたく言えば、この社会について、それを分類し記述し対象化してきたのは男たちの言葉である、という批判であった。そこでは女性は沈黙を強いられ「不可視の状態」に放置されるだろう。この状態に対してその本が提示するのは、「女の言語使用形式」のたえざる実践の主張である。つまり、女性の言葉の不断の発動宣言であった。

しかし、事態はもう少し複雑なのではないか。沈黙から言語の使用形式の変革までの道のりが長いというだけではない。少なくとも「男の言葉」を拒否することがそのまま女の言葉を表面化させることになる、というわけにはいかない。D男／女の経験と男／女の言葉との関係は、そういう対称性のもとにあるのではない。それはヒエラルキー(注)の歴史的重力のもとにおかれている。「家父長的秩序における女の沈黙（および不可視性）」について語る言葉、それを明らかにする言葉はどのようなものでありうるのか。可視性へと引きあげる言葉はどこから手に入れるのか。端的にいえば、女性の経験を語りうる言葉、その不可視性の水準を記述しうる言葉は、さしあたり「男の言葉」でしかないかもしれないのである。そこでは、自分たちに沈黙を強いてきた言葉によって、さらにいえば性支配として機能する言葉を通して、みずからの切実な経験を語らなければならないのである。女の言

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

葉が始動するとき、そのときは男の言葉が指示する女の経験だけでなく、同時に、それを支える男の経験をも相対化しなければならないだろう。「家父長制的な意味基盤」を生きる経験を内側から語りつくすとは、そのような逆説的な言語行為をひきうけるということであろう。

（市村弘正『小さなものの諸形態』による）

（注）　ヒエラルキー――上下関係の整ったピラミッド型の身分組織。

問４　傍線部Ｄ「男／女の経験と男／女の言葉との関係は、そういう対称性のもとにあるのではない。」とあるが、その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　男が経験を語ろうとするとき、男の立場だけでなく女の立場も配慮するという行き届いた関係になっていないから。
②　女はその経験を語ろうとするとき、「男の言葉」を拒否し、女性の言葉を不断に発動させる必要があるから。
③　男にしろ女にしろ、経験と言葉との関係は、経験があればそれをすぐさま言葉にできるというものではないから。
④　男が経験を表現する言葉を持ち得たのに対して、女はそれを持ち得ないような家父長制のもとに置かれてきたから。
⑤　男の言葉と女の言葉との関係は、その本質に差があるものではなく、厳密には使い分けができないものであるから。

問５　本文の中で述べられている内容に合致しないものを、次のうちから二つ選べ。順序は問わない。

①　家族は言葉を必要とする事態が発生したら無力である、というある社会学者の指摘自体が家族を分節化するさまざまな言葉を誘発している。
②　家族は従来、個人の経験の場としての意味をもっていたが、逆にそれが個人の経験の範囲を狭めてしまうものとして認識し直された。
③　現代の「商品化の精神」によって、だれもが同様の経験をすることができるようになり、個人の経験がもっていたはずの独自性や一回性といった意味が奪われてしまった。
④　家族というものが見直されるに際して、最も注目されたのは、それまで家族の中で軽視されてきた女性の経験であり、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

女性をめぐる言葉であった。

⑤『男が言語をつくった』という本は、「家父長制」という概念を用いて「不可視の状態」に置かれてきた女性による言語の占有を意図し、価値観の変換を図ったものである。

⑥女性は、現在でも積み重ねられた歴史の中に置かれているがゆえに、女性自身の言葉ではなく、男性の言葉によって自らを語らざるをえない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講　知識モノ解説

語句

家父長制＝かふちょうせい→戦前の旧民法に見られるような男中心の家制度。家長である父、男の支配権力の強い家のありかた

ヒエラルキー→位階制・ピラミッド型の上下関係　ヒエラルヒー・ハイアラーキーともいう

不断＝ふだん→断えないこと・ノンストップ　常日頃を意味する「普段」と区別しよう

対象＝たいしょう→学問研究などが向かう相手、物質・対象物・オブジェクト

cf対象的に見る＝客観的に距離をおいて見る

対称＝たいしょう→図形的なバランス・シンメトリー　例　線対称・点対称・左右対称

cf対照＝たいしょう→質的な差異や対比・コントラスト　例　姉妹なのに対照的な性格だね

端的＝たんてき→短くずばり

相対化＝そうたいか→絶対化しない・比較考察の相手とする

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第四講

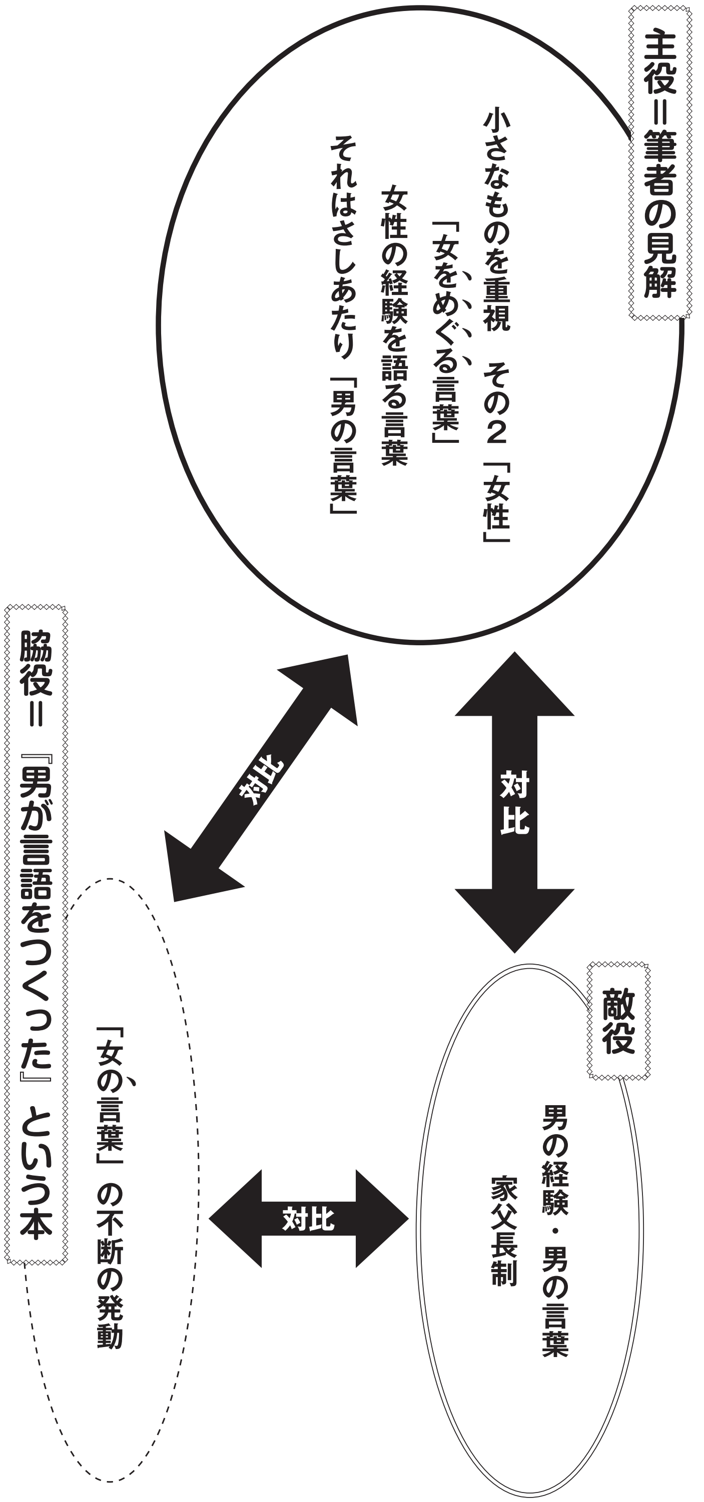
次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）言葉のテイ義を正確にする　①底　②体　③提　④訂　⑤定
（イ）男による言葉のセン有状態　①選　②占　③浅　④宣　⑤践
（ウ）物理学の研究対ショウとする　①証　②称　③象　④照　⑤償
（エ）左右対ショウな図形を置く　①象　②昭　③照　④称　⑤床
（オ）これまでチン黙を強いられる　①沈　②鎮　③枕　④陳　⑤珍
（カ）不ダンに雨が降り続く　①談　②段　③断　④弾　⑤暖
（キ）絶対視せずソウ対化する　①相　②壮　③双　④奏　⑤想
（ク）社会の変カクに乗り出す　①閣　②核　③確　④画　⑤革
（ケ）向こうの提案を拒ヒする　①非　②被　③否　④誹　⑤批
（コ）能力の水ジュンを高める　①純　②準　③順　④巡　⑤准

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講　家族論・ジェンダー論・言語論（後編）

《本文の対比構造》



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問４《傍線部説明・選択肢》

従来の支配層ともいえる男については、「男の経験」を語る「男の言葉」がある。一方、肝心の「女性の経験」を語るとき「女の言葉」でいいとはいえないということです。例えば、「日本の歴史」（世界の歴史でもほぼ同様ですが）は、従来、政治軍事外交史を柱としてきましたね。将軍や政治家の名前が列挙され、〇〇年、〇〇戦争、〇〇条約といった事項が歴史教科書には書かれています。そこでは「男の経験」を「男の言葉」（論文の言葉、および男性学者の言葉）」で語ってきたということです。戦後変革されるまで、東大や京大のような旧帝国大学（東北大を除き）は女子学生の入学を認めていませんでしたから。国家社会の担い手は男、それを研究して語るのも男とみなされていたのです。他方、筆者が注目の「女の経験」を語るとき（当然、女性がいなかった時代や社会はない）、「女の言葉（女ことば＝「～なのよ」「～だわ」のような言葉あるいは女性研究者の言葉）」でよいのか、いやそうはいかないよというのが筆者の見解です。やはり論文の言葉（男ことば）で語ることになるし、また男性研究者が、「女の経験」を語る歴史書や社会学の本を書いてもよいわけです。また家庭内においても「家父長制」の下、お父さんの決定権が絶対的だった。因習的道徳として、女性は、幼少期は父兄に従い、結婚後は夫に従い、夫の死後、老いては子に従うのがよいとされた。いわゆる「三従」です。まさに女性は「沈黙を強い」られた。こうしたことを「男／女の経験と男／女の言葉との関係は、そういう対称性のもとにあるのではない。」といっているのです。したがって、④が正解です。③と⑤は、そうした男女の違いを踏まえず同じようなものとしてしまってます。「男にしろ女にしろ」「男～女～本質に差があるものではなく」がそれぞれ×ですね。対比で書かれたものを混ぜています。すなわち対比混乱の誤りです。①は「男が～女の立場も配慮する」が×です。テーブルにつくときに男性が女性の椅子を引いてあげるとか、ドアを先行して開けてエスコートするとか、そんな〝お気遣い〟レベルになっています。家父長制や長く重い歴史的重力、歴史的性支配を踏まえた文章のはずが、スコンとかるーい話になっています。こういうのを不当な矮小化の誤りと呼びます。これも名前付きの間違いだよ。つまり、入試の選択肢でよくあるということ。②はどうでしょう。「『男の言葉』を拒否し、女性の言葉を不断に発動させる」が×です。これは筆者の見解ではなく、『男が言語をつくった』という本の主張です。筆者側とは区別されているものを混ぜてはいけません。ここでも〝混ぜるな危険〟ですよ。すなわち、対比混乱の誤りです。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問５《全文理解に基づく間違い探し・選択肢》

①は第三講で読んだ箇所ですが、正しい指摘です。過去の「ある社会学者の指摘」、すなわち家族は言葉を必要としないという考えがこれまで主流だったからこそ、いま、堰（せき）を切ったように家族について言葉があふれ出ようとしているわけです。②は第三講の問３の各選択肢と似ています。まず、「本来」と「従来」を取り違えています。「従来」というなら家族の意義を軽視する表現となるはずが、「従来、個人の経験の場としての意味をもっていた」とやってしまいました。対比混乱の誤りです。さらに後半の「狭めて」の否定評価は、筆者のものではありません。したがって、記述に反するとも対比混乱の誤りとも言えます。そうして、これが間違いと指摘できたら、得点になるという問題だよ！　いい問題だねえ。④は「女性の経験」「女性をめぐる言葉」に注目する内容で、きっちり筆者の意見を踏まえています。正しい指摘です。⑥はどうか。「積み重ねられた歴史の中に置かれている」は、本文の「ヒエラルキーの歴史的重力」を言い換えたものとしてOKです。また「ゆえに、女性自身の言葉ではなく、男性の言葉によって自らを語らざるをえない」も本文に照らして正しい指摘です。女性について語るためには、いわば〝敵の言葉〟である「男の言葉」を使わざるをえないのです。他の例を出してみます。たとえば、かつてイギリスに植民地支配されていた小さな南の島があったとして、その固有の歴史や社会のありかたを、国際社会に発表するには、どんな言葉で語るのかということです。現地の○○語では現地の人しか理解できません。そうです、英語で、かつて自分たちを支配した敵の言葉で世界に語るということになる、こういうことです。では、③か⑤か、どちらを間違いの選択肢として採用するか。⑤です。③は、「商品化の精神」の内容を説明していますが、これは本文の記述なしです。記述がないだけでは間違いとはいえないという点は、覚えておきましょう。はっきり「○○の誤り」といえるものを優先します。これはこうした〝間違い探し問題〟でのテクニックです。⑤は、はっきり×です。『男が言語をつくった』という本は～女性による言語の占有を意図」がいけません。本文によれば、この本が意図しているのは「女性の言葉の不断の発動宣言」です。今まで黙らされていたぶん、しゃべりつづけるぞ、ということです。けっして「占有」し、男にとって代わるのではありません。「占有」では、今後男は沈黙し、女性だけが言語活動をするということになります。こういうわけで記述に反する誤りです。また、かつての男の言葉による「占有」という表現を女性側について使ってしまっているという点では、対比混乱の誤りです。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

模範解答

問４＝④　問５＝②・⑤（順不同）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　解答　第四講

（ア）⑤　（イ）②　（ウ）③　（エ）④　（オ）①

（カ）③　（キ）①　（ク）⑤　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）定義　（イ）占有　（ウ）研究対象　（エ）左右対称　（オ）沈黙

（カ）不断　（キ）相対化　（ク）変革　（ケ）拒否　（コ）水準

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。